松尾山の群集墳
－松尾十三塚古墳群の紹介も含めて－

丸川 義広

1．はじめに

狭隘な保津狭から放たれた桂川が、京都盆地を最初に潤す地域が嵯峨野である。嵯峨野といえば、高燥な台地が広がる左岸の一帯を思い起こすが、これは狭義の嵯峨野であって、桂川右岸の嵐山・松尾の地域も広義の嵯峨野に含めて考えることができる。

広義でいう嵯峨野は現在、桂川の左岸域が京都市右京区に、右岸域が京都市西京区に属している。しかし、西京区は1976年10月にできた行政区であり、それまでは同じ右京区に属していた。その右京区も、1931年に町村が合併してできた区である。もとの嵯峨野は、すべて旧葛野郡に属していたのである。

ところで、地域を区分する場合は河川や山系などの自然要因で線引きされるのが常である。この点でいうと、桂川の両岸を含む旧葛野郡嵯峨野の範囲は一見矛盾するように見うけられる。しかしここは桂川の谷口部分を占めるため、下流域への水利慣行を考えた場合、はなはだ重要な地域であったことは容易に想像がつく。両岸地域が同じ葛野郡に属した背景には、水利権をめぐる地縁上の強固な結び付きがあったと考えられるのである。

一方、広義の嵯峨野はその丘陵部に古墳が多数築かれる点でも共通性がある。これら古墳の大半は、古墳時代後期に築かれた群集墳とよばれる小規模古墳であるが[(1)]、それが多数築かれた背景としては、眼下に広がる平野部に集落が多数存在したためと考えられる。事実、右京区の平野部においては古墳時代後期の集落遺跡が多数知られつつあり、京都盆地の中でも最も人口の集中する地域であったことが明らかになっている。

嵯峨野はまた、京都盆地の開発を推進させた渡来系氏族、秦氏の本拠地の１つとしても有名である。このため、嵯峨野の古墳群を検討する場合、秦氏との関係を整理することが必要となる。このことは、京都盆地の古墳時代を考える上でもはなはだ重要であるため、最後に項を設けて検討してみよう。

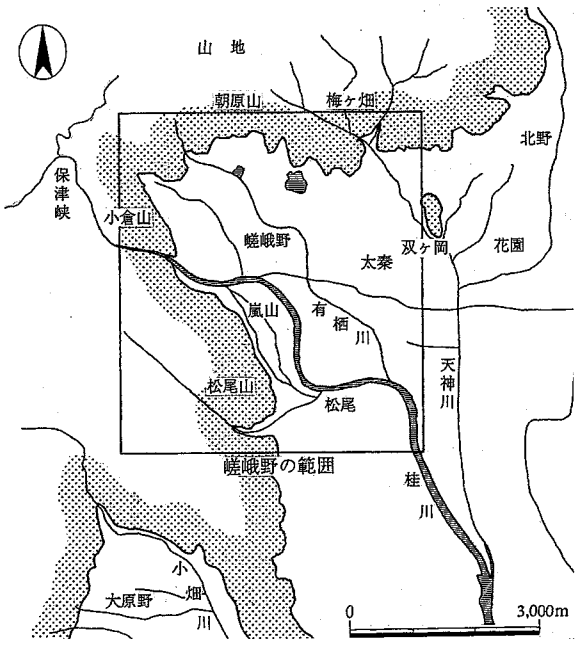

図１ 関係位置図（『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 1997年より作成）

筆者は以前から、桂川右岸地域の古墳群を調査する機会があり、古墳群の動向についても若

干の考察を行なったことがある[2]。しかし、そのいずれもが松尾以南に分布する古墳群を対象としており、嵯峨野の古墳群についてはとりたてて論じることはなかった。ところが、1995年度になって京都市では遺跡地図の改訂があり、「松尾十三塚古墳群」が再登録されるとともに、松尾山上と西芳寺川沿いでは多数の古墳が追加登録されたことで、古墳分布が一変する事態となった。松尾十三塚古墳群の再登録にあたっては、筆者も少なからず関与しており、まずこの場を借りて古墳群の内容を紹介する。ついで松尾山上と西芳寺川沿いに築かれた古墳群について、筆者の踏査結果も踏まえて現状を紹介する。そして、左岸の嵯峨野に分布する古墳群との関係を整理した上で、広義の嵯峨野に築かれた古墳と秦氏との関係について、若干検討を加えたいと考えるものである。

2．松尾十三塚古墳群

①遺跡地図での扱い　松尾十三塚古墳群は、京都府教育委員会が1972年に刊行した『京都府遺跡地図』（以下、『府地図72』[3]）の台帳部分に登録されている。そこには「(府番号) 3980　(市番号) 113　(名称) 十三塚古墳群　(種類) 円墳　(所在地) 松尾　(遺跡の概要)　平地、松尾神社東方　(出土品) 空覧　(文献) 55　(現状) 全壊」とある。しかし地図部分（図版56）には位置が明示されていない。

1983年に刊行された『史料京都の歴史』[4]2には、引き続き「157　十三塚古墳群　①（所在地）松尾神社付近　②（立地・地目）松尾神社東方、平地　③（遺構・遺物）墳形不明、土師器　④（時代）後期　⑥（参考文献）198、269、293、1258」として収録されているが、その内容は前述の遺跡地図を転記したものである。ところが、その後に刊行された遺跡地図、たとえば京都市文化観光局による『京都市遺跡地図』1980年[5]（以下、『市地図80』）、『京都市遺跡地図』1986年[6]（同じく『市地図86』）、京都府教育委員会による『京都府遺跡地図』第4分冊1989年[7]（『府地図89』）などでは登録が外されてきた経緯がある。その原因であるが、『府地図72』の段階で「全壊」とされ、位置が明示されていなかったことが大きく影響したと考えられる。筆者は、『京都市遺跡地図』1996年[8]（『市地図96』）の改訂に際して、この古墳群を再登録させるべきと考え働きかけを行なった。そして『市地図96』では、「(番号) 919　(遺跡名) 松尾十三塚古墳群　(種類) 古墳　(時代) 古墳　(所在地) 松室追上ゲ町　(概要) 現状は宅地となっているが、かつて十三塚と呼ばれた古墳群が存在した」として登録されるに至った。

②資料の整理　それでは、松尾十三塚古墳群はどこに所在し、どのような古墳群であったのか、それを知る資料として、以下の6例を提示する。

文献1[9]　「松尾村の十三塚　官幣大社松尾神社の南東方の畑中に俗に十三塚と称する6個の円形古墳在り。其の南端の1個には石槨露出せり。此の塚の概要は「郷土研究」2ノ5所載の「十三塚」なる拙稿中に記したれば、ここにはただ其の所在を報ずるに止め、詳細は該誌に譲らんとす。」

文献2[10]　「十三塚　・・先づ松尾の十三塚から述べるが、これは山城葛野郡松尾村大字松尾小

字山ゾエ、同オウアゲの田圃にあつて、丁度官幣大社松尾神社の南東１町に当たつて居る。封土は元十三個あつたと云ふが現存しているのは６個で、其配置には別段に特色なく、たゞ雑然と散在して居たやうである。封土の形状は最南端にあるものは高さ８尺、周約６間の円形封土をなし、中央に石槨が発掘せられあり。第２の封土は此より北々東約３間に当り、高さ約６尺周約18間ある。此封土の北西約１間半に２個の小封土が南北に並び、更に其北に接して高さ約１間余の大形の封土がある。第６の封土は此北約10間余にあつて周約15間高さ６尺の完全な円形封土をなして居る。尚此外に破壊せられて今は存在せぬが元第３及第４封土の東側と西側に相対して２個の封土あり、又第６封土の南西にも同様の塚があつたとの事である。

此封土十三塚と称するは、其数が十三あつたからだと土人が云ふてをる外には、別に何等の伝へもないやうであるが、たゞこの凡ての封土が純然たる古墳墓であるのは面白い事実と思う。封土の築造を見るに、何れも砂礫を盛つて造つたもので特に前述第１封土には幅５尺９寸長さ13尺４寸の石槨が現存して居る。又既に破壊せられた塚からも種々な遺物が出たとの事である。柳田氏は嘗て其「十三塚」の論文中に所謂十三塚と称するものが古墳なるや否やは発掘して調査するを要すると云はれたが、此塚よりして少くとも多くの十三塚の中には古墳墓もあることを知り得たのである。」

文献[11]３　「松室の北方には十三塚七田といつて十三の古墳があり七枚の田があった由、今は墳の残缺ばかり残り只一つ最も南のものだけが基底のみを残し前方後円の型をとつている。その外は全然形が不明である。「ふけ塚」ともいふのは貴家の意味ではあるまいか。」

文献[12]４　「泓塚（ふけのつか）　在_ 同所民居東_　在_大塚七ツ_由縁不レ詳」

文献[13]５　「桜塚（さくらづか）　泓塚（ふけづか）　当村_在　大塚七_由来不レ知」

文献[14]６　「〔京都府〕　NO.252　①京都府京都市西京区松室追上げ町～松室中溝町（京都市右京区追上げ町）　②十三塚　③消滅（十三基）　④南北に一列に並んでいた。　⑤石積みがしてあったらしい。また大きさに大小があったらしい。宝暦４年（1754）の『山城名跡巡行志』には、当地に由来の知れない泓（ふけ）塚、桜塚という塚があったと記されている。昭和13年刊、松尾尋常高等小学校の『松尾乃郷』によると十三塚七田といって、十三の古墳と七枚の田があったが、そのうち最も南の１基だけが基礎のみを残すとある。更に、昭和20～30年代に宅地化が進み、付近一帯は住宅地となった。　⑥京都市教委（青山淳二）⑦『十三塚考』、『郷土研究』２、『人類学雑

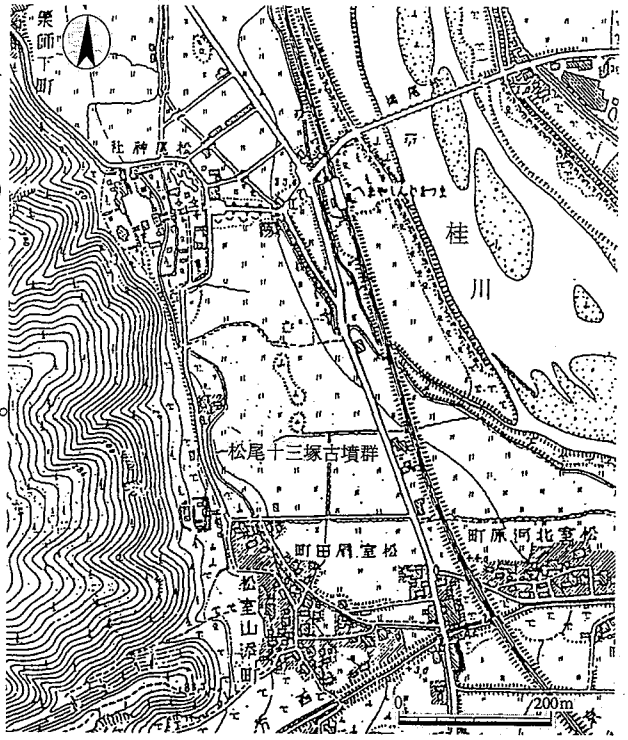

図２　松尾十三塚古墳群の位置（昭和13年測図１万分の１地形図「桂」より）

誌』220、『歴史地理』２－５－５、『山城名跡巡行志』（京都叢書所収）、『松尾乃郷』

③古地図での検討　以上の資料から、松尾十三塚古墳群は松尾神社の南東方向の水田中にあったことが判明する。次に古地図から古墳群の位置を求めてみよう。

初めての近代的な地図として著名な明治22年測量の仮製２万分の１地形図や、これより遅れて製作された明治42年測量の２万分の１地形図には墳形は描かれていない。しかし大正から昭和初めに作成された3,000分の１都市計画基本図では、松尾神社の東南約200mの水田中に４基以上の古墳らしき高まりが描かれている（図３）。文献２の記述に従って南から述べると、南端の１基は南北に20m強の細長い墳丘に描かれる。２基目は直径15m程度の円墳、その北には南東方向に細長い土手状のものをもつ長径15m程の楕円形の墳丘があり、最後に畦をはさんだ北側に直径５m程の小さな円墳が描かれる。昭和初年に撮影された空中写真[15]においても、上記地図と同じ状態の墳丘が写されている。ところが、昭和13年測量による１万分の１地形図（図２）では、南２と南３のものが連結した状態で描かれているが、基本的には上の地図と同じ配置となっている。

以上述べた水田中の小規模な高まりが、松尾十三塚古墳群であったことは疑いない。古墳群はこのような状態で戦前には存在していたのである。しかし、その後削平されて住宅地となった。遺跡地図が整備される頃にはすでに正確な位置は不明となっており、この結果、今日まで登録もれの状態が続いたとみてよい。

④古墳群の内容　古墳群の様子を詳細に記した文献２と古地図を対比させながら、古墳群の様相を復原してみよう。

文献２によると、古墳群は６基で構成され、さらに壊滅したものが周囲に３基あったという。古墳番号を南から１～６として、その規模と配置を想定したのが図４である。古墳群の構成が図３に掲げた3,000分の１都市計画基本図と基本的に同じであることが理解される。

細部をみると、文献２で第３・第４とした小封土の並びが、地図では５の南東側に付属する細長い土手状のものに該当することがわかる。古墳の規模についてみると、文献２では古墳周囲を歩測した際の数値があげられており、これをもとに直径を

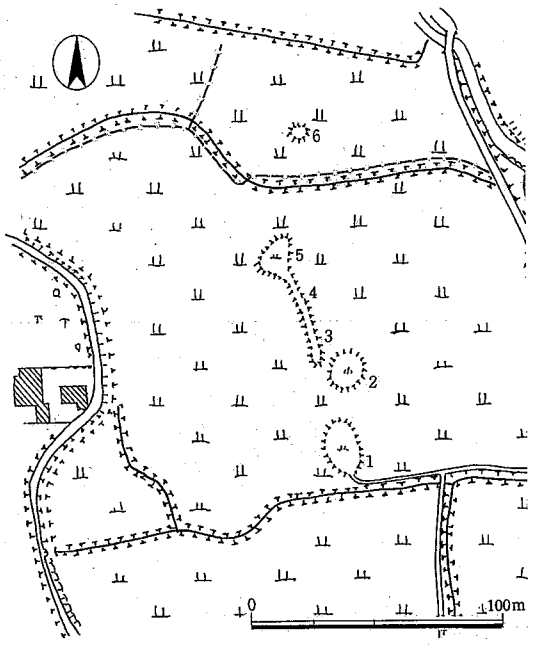

図３　松尾十三塚古墳群の位置（数字は文献２による）

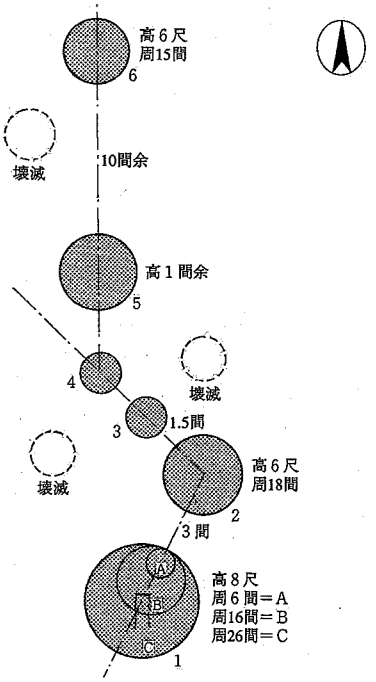

図４　松尾十三塚古墳群の復原（文献２から作成）

算出すると、１の古墳のみ地図とは著しく異なることが判明する。この古墳は高８尺とされるので、周６間ではあまりにも小さすぎる。この箇所のみ誤記の可能性が高く、地図を参考にしても、おそらく２の古墳程度の規模があったことは十分想定できる。また、古墳封土が砂礫で構成されるという記述も興味深い。墳丘崩落箇所で断面観察された結果を記したものと思われるが、墳丘構築方法を推定する上での貴重な記述である。

主体部に関する記述では、１の古墳で石槨が露出すること、およびその寸法を記している。それによれば、石槨は幅５尺９寸（約1.8m）、長さ13尺４寸（約4.1m）あったという。その数値から、横穴式石室であったことは明らかで、石室幅もけっして狭いものでなかったこともわかる。埋没状況など他にまったく手がかりはないが、後述する３古墳群の石室に比べ規模が大きい点で、築造時期の推定に役立つ記述である。

なお文献３では、南端の１基が前方後円の形態をとるとされる。確かに図３を見ても、１の古墳は南北にやや細長い墳形に描かれる。文献３はこのことを指すのであろう。

以上、文献２・３と大正末頃の状況を描いた古地図を対比しながら、古墳群の状態を復原してみた。基本的に両者の内容には共通性が高いが、細部に異同があることも明らかとなった。特に古墳の規模に関しては、梅原報告と地図には食い違いがあり、１の古墳の規模は明らかに梅原報告の誤記の可能性が高いことも指摘できた。しかし、梅原の報告は大正３年段階で成されたものであり、３・４の古墳の場合などは梅原報告が元の状態を示しているとみるべきである。

⑤十三信仰並びに「ふけ塚」について　十三塚信仰[16]は中世から近世始めにかけて流行した民間信仰の一種で、村々の境界に塚を十三基並べることで悪霊の侵入を防いだり、あるいは死者の供養や修法のための壇として用いられたものをいう。通常は塚が直線的な配置をなし、中央には「将軍塚」や「大将塚」といった大型の塚を、左右には小型の塚が築かれることが多い。しかし発掘調査によっても遺構・遺物の状態が明確に捉えられるものは乏しいという。

古墳群が十三塚信仰と混同される例も少なからずある。文献２とした梅原の報告は、大正３年に作成されたものであるが、本文中に「十三塚の中には古墳墓もあることを知り得たのである。」と断わるほど、古墳群と十三塚の関係は整理できていなかったのである。そのため、十三塚の中に確実に古墳群が含まれる例として、梅原はこの松尾十三塚を例に紹介したのであった。

松尾十三塚古墳群とは別に京都市山科区西野山中臣町にも「中臣十三塚古墳群[17]」が所在する。こちらも名称の由来は明らかにし得ないが、塚の配置などから十三塚信仰と重なり伝承されたものと推定される。

ところで、松尾十三塚古墳群には「ふけ塚」なるものが含まれる。位置は特定できないが、その意味するところについて若干述べておきたい。文献３では「「ふけ塚」ともいふのは貴家の意味ではあるまいか。」と記すが、ここでいうふけ塚は、文献４・５にある「泓塚（ふけのつか）・・由来不詳」として紹介されるものと同一とみてよい。この「泓（ふけ）」には、「水たまり・水のふち」の意味があるため[18]、水の滞った状態を指す言葉とみてよい。実際、『山州名跡志』巻之五「後二条院陵[19]」には、「・・中比陵ノ巡リ凹ニシテ。常ニ水アリ。仍テ泓塚（ふけづか）トイフ。後埋デ平ナリ。是ヨリ泓ヲ改

テ。福塚トイヘリ。」として、後二条天皇の御陵とされた「泓塚」の由来が記されている。しかし、松尾十三塚古墳群中のふけ塚は「泓」の状態でなかったので、文献３の著者浅井暦造氏は、「ふけ」を貴家の転化したものと理解されたようである。その貴家であるが、江戸時代の地誌類には「富家殿」「富家ノ里」「富家ノ渡」「普化ノ墓」などとして散見でき[20]、主に市内南部から宇治地方にかけて登場する地名となっている。

⑥　小結　文献１～文献６の記述、並びに古地図によって、松尾十三塚古墳群は松尾神社の東南約200mの水田中に所在したことが明白となった。そして、大正３年当時には古墳の高まり６基が現存し、さらに周囲には壊滅した古墳が３基あったこと、墳形はすべて円墳で、うち１基には横穴式石室が観察されたことも判明した。この古墳群は、主体部から判断して古墳時代後期に築造された古墳群であることは確かであるが、低地に立地する点で丘陵部の群集墳と同一視できない条件も有している。この立地条件は古墳群の性格を知る上で重要となるので、第６章で改めて検討してみたい。

３．松尾山古墳群

①古墳群の構成　『市地図96』と筆者の踏査から、本古墳群は合計45基以上の古墳からなり、グルーピングは以下の18が妥当と考えられる。

Ａ（山田古墳）、Ｂ（７基、『市地図96』より登録）、Ｃ（２基以上、1997年４月筆者確認）、Ｄ（７基、『市地図86』より松尾谷古墳群として登録）、Ｅ（２基、『市地図96』より登録、消滅）、Ｆ（松尾神社西方１号墳）、Ｇ（『市地図96』より登録）、Ｈ（松尾神社西方２号墳）、Ｉ（松尾神社西方３号墳）、Ｊ（２基以上、1997年３月筆者確認）、Ｋ（『市地図96』より登録）、Ｌ（３基、松尾山古墳群）、Ｍ（６基、松尾山古墳群）、Ｎ（２基、『市地図96』より登録）、Ｏ（『市地図96』より登録）、Ｐ（３基、『市地図96』より登録）、Ｑ（『市地図96』より登録）、Ｒ（２基、1997年10月確認）。

②遺跡地図での変遷　松尾山古墳群は、遺跡地図ごとに古墳数やグルーピングそのものが変化してきた。このことは、古墳群の性格を理解する上でも重要な意味をもつ。ここでは遺跡地図を年代順に整理し、その変遷を整理する。

『嵯峨野の古墳時代』1971年（以下、『嵯峨野71』[21]）　松尾神社西方群集墳としてＦ・Ｈの２基が、また松尾山群集墳としてＬ・Ｍの３基のみが登録される。合計５基にすぎないが、名称はこの段階で決められている。Ｌ・Ｍは３基が登録されるが、なぜ周辺古墳が検出できなかったのか疑問である。これらの古墳は存在が明確なだけに、結局のところは十分な現地調査が行なわれなかったことが原因とみられる。

『府地図72』　59山田古墳が新たに登録される。全体は60松尾山古墳群の名称に統一され、Ｆ・ＨとＬ・Ｍが引き続き登録される。松尾山３号墳はＩとみられるが位置が異なる。Ｌ・Ｍは古墳数が若干増加するが、実体にはほど遠い。７号墳は現在該当するものがない。

『市地図80』　402山田古墳、406松尾神社西方古墳群（３基）、407松尾山古墳群（４基）の構

図５　松尾山古墳群と周辺の古墳群（『市地図96』をもとに作成、番号は1997年10月現在）

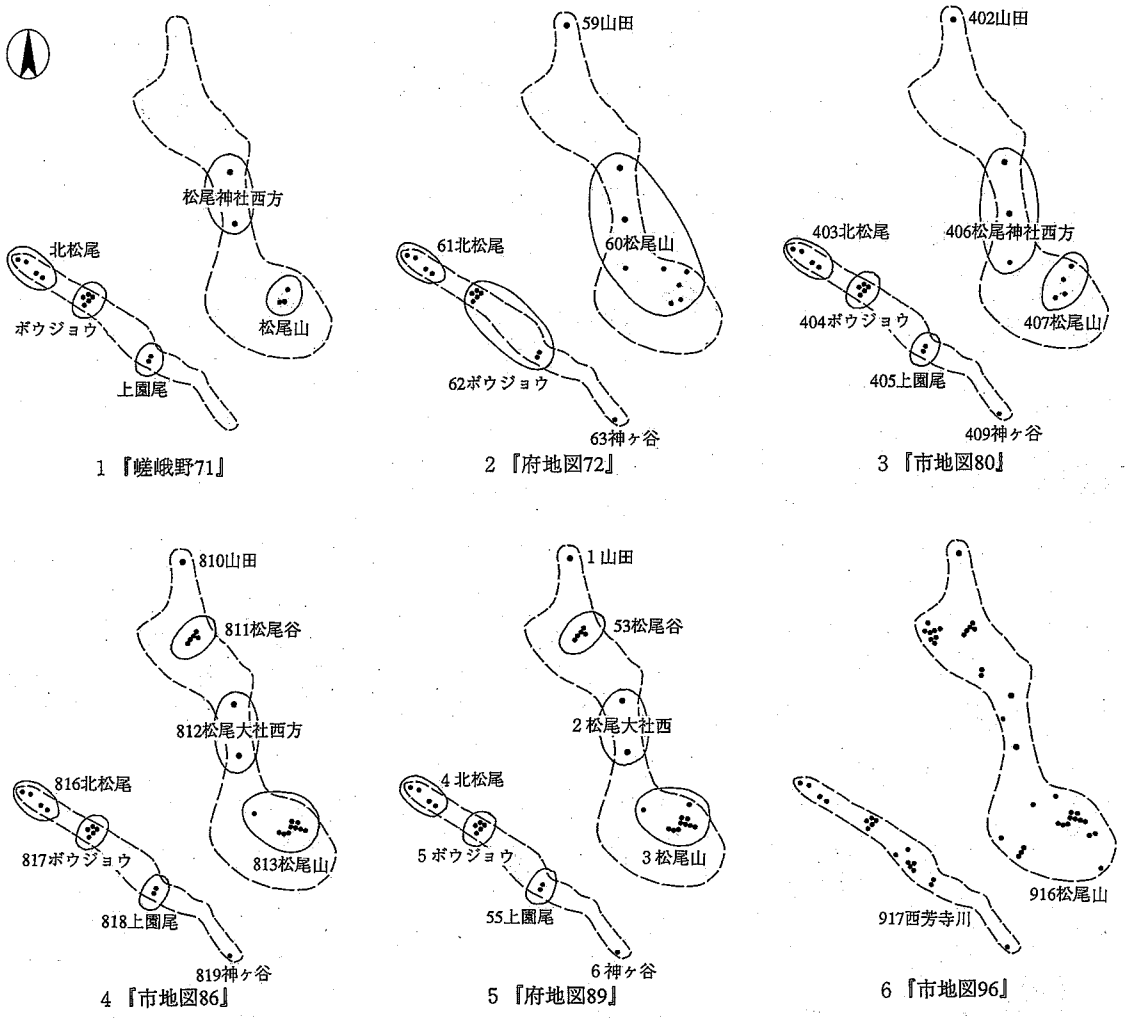

図６　松尾山古墳群と西芳寺川古墳群の変遷

成となる。古墳総数は上記『府地図72』に同じであるが、松尾神社西方古墳群と松尾山古墳群に２分される状態は、『嵯峨野71』に戻る。

『市地図86』　811松尾谷古墳群が新たに登録され、810山田古墳、812松尾大社西方古墳群、813松尾山古墳群の４群構成となる。松尾大社西方古墳群の南端の１基は松尾山古墳群に含まれる。松尾山古墳群は古墳数が増加し10基となる。

『府地図89』　上記の『市地図86』と同じく、１山田古墳、53松尾谷古墳群、２松尾大社西古墳群、３松尾山古墳群の４群構成で変化がない。松尾山古墳群が10基から11基となる。

『市地図96』　京都市としては10年ぶりの遺跡地図改訂で、現行版でもある。この地図において、山田古墳・松尾谷古墳群・松尾神社西方古墳群・松尾山古墳群とされてきたものが一括されて「松尾山古墳群」となった。その要因であるが、Ｂ・Ｎ・Ｐが確認されたことや１基単位のＫ・Ｑが確認されたことで、個別の古墳群として把握することが難しくなり、全体がひとまとめにされたとみられる。また、古墳の新発見情報に関しては、古墳発見に努めてこられた屋木秀雄氏の成果によるところが大きい[22]。

なお、昭和13年に発行された『松尾乃郷』では、「松尾山の頂上部に五基、月読宮の上方に十一基の円墳があるが何れも盗掘にかゝつて居る。」としているが、これがＦ、ＨとＬ・Ｍをさす

ことはその位置から明白である。このように、過去の資料においても松尾山古墳群に関する記述は存在しているのであって、遺跡地図作成に際しては、事前の資料調査と現地の踏査が必要なことを改めて強調しておきたい。

③古墳群の特徴　A　**立地**　古墳は山頂、尾根筋、山腹、谷間の裾部などの各部に築かれる。様々な立地条件をもつことが、この古墳群の特徴でもある。

山頂にはA、B－1、F、Hが築かれる。B－1は全くの埋没状態であるが、A、F、Hは横穴式石室が露出する。最高の立地条件をもつため、平野部から仰ぎ見た場合の視覚効果が期待でき、古墳群中の最も優位な被葬者が想定できる。ところが、古墳の築かれた地点を細かくみると、たとえばHでは最高所からやや北に下った地点に築かれている。このことはA、B－1においてもいえることで、最高所を避けて立地した印象を与えるものである。

尾根筋にはCの2基、J－1、Lの3基、Nの2基、Rの2基が築かれる。立地は山頂に次いで優れており、眼下には広く平野部が見わたせる。

山腹に立地するものが大半を占める。Pは等高線に沿って3基並んで築かれ、このような配列が基本となる。古墳数が多い場合は2段（B・M)、さらに多い場合は3段（D）に配置される。このような等高線に沿った配列は、群集墳に一般的なものである。

見通しのきかない谷間に立地するものとしてはKとQがある。墳丘規模は小さい。平野部はまったく見通せず、また山頂や尾根筋の古墳からも見通せないことも注意される。後述する西芳寺川古墳群に共通する立地条件をもつもので、注意すべき事項である。

B　**墳丘**　確認する限りすべて円墳である。直径は平均10m程度、大きいもので15m程、高さは1～2mある。周溝が完全に埋没しているため現状では目立たないが、実際にはさらに大きかったとみてよい。墳丘上に横穴式石室の天井石が露出するものも多くみられる。

C－1、Iは特に墳丘の保存が良い。C－1は直径15m以上、高さ3mほどあり、周溝の凹みもよく保存されている。墳頂には盗掘の凹みがあるが、これほど残りの良い古墳がなぜ未確認であったか、不思議である。Iも同様に周溝の掘込みが良好に残る。墳丘が高いのは内部の横穴式石室が完存するためである。

C　**横穴式石室**　大半の古墳は石材が露出するため、主体部はすべて横穴式石室であったとみてよい。現状を示すと、まず墳丘封土が流出し天井石の一部が露出するものが最も多い（A、B－4、D－1、D－4、F、G、K、L－3、M－5、N－2、P－1、P－2)。次に天井石の隙間から内部が観察できるものが少数ある（B－8、C－2、D－3、H、I、M－2、P－3)。石室の様相がある程度判明するものもある（B－2、B－5、B－7、D－2、L－1、M－6)。これらにおいても内部には土砂が充満するため、人が立ち入って観察できるほどのものはない。

石室規模については、奥壁付近で石室幅1m前後のものが大半を占める。袖の型式がわかるものでは、M－6が両袖、L－1が奥から見て右片袖である。M－6は、玄室幅2.0m以上、奥壁から玄室と羨道の境まで3.2m以上あり、玄室長3.6mクラスの横穴式石室である可能性が高い。立

表１　松尾山古墳群一覧表

	古　墳　名	立地・配置	墳形 規模（m）	主体部 規模（m）	備　　考
1	松尾山A号墳	山頂	円墳 径15、高1	横穴式石室	山田古墳、天井石露出
2	松尾山B-1号墳	山頂	円墳 径10、高1	横穴式石室？	市地図96より、山頂やや下り立地
3	松尾山B-2号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室　全長(4.7)、幅(1.0)、高(0.5)	市地図96より、天井石露出、石室・石材小型
4	松尾山B-3号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室、全長(2)、幅(1.25)	市地図96より、墳丘上半削平され石材露出
5	松尾山B-4号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、天井石２枚露出
6	松尾山B-5号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室　全長(4)、幅(1.2)、高(0.8)	市地図96より、石室露出
7	松尾山B-6号墳	山腹	円墳 径13、高1.5	横穴式石室	市地図96より、群中で規模大
8	松尾山B-7号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室、全長(3)、幅(0.8)、高(0.55)	市地図96より、盗掘孔より内部観察可能、石室小型で無袖？
9	松尾山B-8号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、盗掘孔より内部観察可能、石室上半は小型
10	松尾山C-1号墳	尾根筋	円墳 径15、高3	横穴式石室？	970413確認、規模大きい　前面に石材あり
11	松尾山C-2号墳	尾根筋	円墳 径13、高1.5	横穴式石室	970413確認、盗掘孔より内部観察可能
12	松尾山D-1号墳	山腹	円墳 径13、高２	横穴式石室	松尾谷古墳群　天井石と側壁石材露出
13	松尾山D-2号墳	山腹	円墳 径10、高1.5	横穴式石室　全長(2.5)、幅(1.0)、高(1.1)	松尾谷古墳群　天井石露出、内部観察可能、石室は小型で無袖？
14	松尾山D-3号墳	山腹	円墳 径10、高1.5	横穴式石室	松尾谷古墳群　天井石４枚露出、内部観察可能、石材規模大
15	松尾山D-4号墳	山腹	円墳 径10、高1.5	横穴式石室	松尾谷古墳群　天井石１枚露出
16	松尾山D-5号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室？	松尾谷古墳群　墳丘低く目立たない。中央に凹みあり
17	松尾山D-6号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室？	松尾谷古墳群　97.3.26確認、墳丘目立たない。石材散乱
18	松尾山D-7号墳	山腹	円墳 径10、高1	横穴式石室？	松尾谷古墳群　97.3.26確認、墳丘目立たない。
19	松尾山E-1号墳	山腹			古墳か？
20	松尾山E-2号墳	山腹			古墳か？
21	松尾山Ｆ号墳	山頂	円墳 径23、高3.5	横穴式石室　全長(7.5)	松尾神社西方１号墳、山頂に立地、墳丘規模大、天井石と側壁石材露出、石材大
22	松尾山Ｇ号墳	谷間斜面、裾部	円墳 径10、高1	横穴式石室	天井石２枚露出
23	松尾山Ｈ号墳	山頂	円墳	横穴式石室　全長(7)	松尾神社西方２号墳、墳丘目立たない。天井石５枚露出、内部観察可能
24	松尾山Ｉ号墳	丘陵腹部	円墳 径13、高2.5	横穴式石室	松尾神社西方３号墳、見通しきかない。墳丘残存良好、盗掘孔より内部観察可能
25	松尾山J-1号墳	丘陵尾根筋	円墳 径10、高1		97.3.23確認、古墳か？

数値は推定を含む　　（　）は現状値

	古　墳　名	立地・配置	墳形 規模（m）	主体部 規模（m）	備　　考
26	松尾山J-2号墳	丘陵尾根-腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室	97.3.23確認、古墳か？
27	松尾山K号墳	谷間斜面、裾部	円墳 径7、高1	横穴式石室	見通しのきかない谷間にあり、天井石露出、墳丘・石材とも小規模
28	松尾山L-1号墳	丘陵尾根筋	円墳 径11.5、高1	横穴式石室　右片袖 幅(0.85)	松尾山古墳群、天井石露出、内部観察可能
29	松尾山L-2号墳	丘陵尾根筋	円墳 径12、高1		松尾山古墳群
30	松尾山L-3号墳	丘陵尾根筋	円墳 径15、高1	横穴式石室	松尾山古墳群、石材露出
31	松尾山M-1号墳	丘陵腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室	松尾山古墳群、石材露出
32	松尾山M-2号墳	丘陵腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室	松尾山古墳群、天井石露出、内部観察可能
33	松尾山M-3号墳	丘陵腹部	円墳 径13、高1	横穴式石室？	松尾山古墳群
34	松尾山M-4号墳	丘陵腹部	円墳 径15、高2	横穴式石室	松尾山古墳群、天井石露出、内部観察可能
35	松尾山M-5号墳	丘陵腹部	円墳 径13、高1	横穴式石室	松尾山古墳群、天井石２枚露出
36	松尾山M-6号墳	丘陵腹部	円墳 径15、高2	横穴式石室　両袖？ 玄室長(3.2)、幅(2.0)、高(1.1)	松尾山古墳群、この支群では規模大、天井石露出、内部観察可能
37	松尾山N-1号墳	丘陵尾根筋	円墳、径10×15、高1.5	不明	
38	松尾山N-2号墳	丘陵尾根筋	円墳、径10、高1.5	横穴式石室	天井石１枚露出
39	松尾山O号墳	丘陵尾根筋			市地図96より、古墳か？
40	松尾山P-1号墳	丘陵尾根筋の腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、天井石露出
41	松尾山P-2号墳	丘陵尾根筋の腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、天井石と側壁石材露出
42	松尾山P-3号墳	丘陵尾根筋の腹部	円墳 径10、高1	横穴式石室　袖不明 幅(1.2)	市地図96より、天井石露出、内部観察可能
43	松尾山Q号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径10、高1	横穴式石室	見通しきかない、天井石露出
44	松尾山R-1号墳	尾根筋	円墳 径12、高1.5	横穴式石室	97.10.18確認、墳丘残存良好、石材露出
45	松尾山R-2号墳	尾根筋	円墳 径10、高1	横穴式石室　幅(1.15)	97.10.18確認、上半削平、側壁石材露出

数値は推定を含む　　（　）は現状値

地の優れたＦ・Ｈの石室も、用いられた石材が大型であることから石室規模は大きかったとみられるが、埋没状態であるため内部の観察は叶わない。

④小結　松尾山古墳群は現在１つの古墳群として扱われているが、古墳数が多いこと、築造箇所が離れること、立地の差異が大きいことなどから、実際には複数の古墳群が集合して営まれた古墳群と考えるのが妥当である。松尾山自体が一つの墓域となっており、立地の差異は被葬者の階層性を反映したものとみてよい。また、通常の群集墳は丘陵斜面に築造されるが、本古墳群の場合は標高のかなり高い山腹に古墳が築かれている。東側斜面が急傾斜であったため、傾斜の比

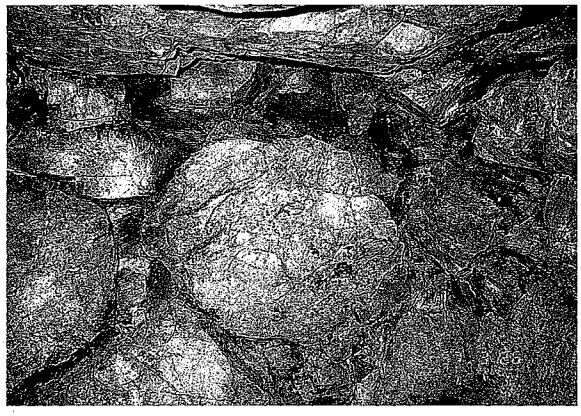

写真１　松尾山Ｂ－２号墳（石室の奥壁）

写真２　松尾山Ｂ－４号墳（天井石が露出）

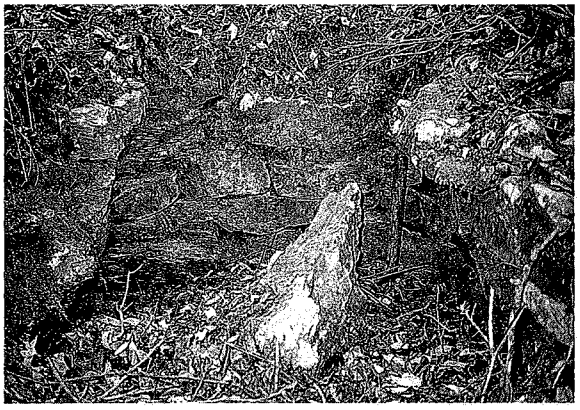

写真３　松尾山Ｂ－５号墳（石室の上半が破壊）

写真４　松尾山Ｂ－７号墳（石室の奥壁）

写真５　松尾山Ｄ－２号墳（開口した状態）

写真６　松尾山Ｄ－２号墳（石室内部）

写真７　松尾山Ｆ号墳（天井石が露出）

写真８　松尾山Ｈ号墳（天井石が露出）

写真９　松尾山Ｍ－６号墳（羨道上の天井石）

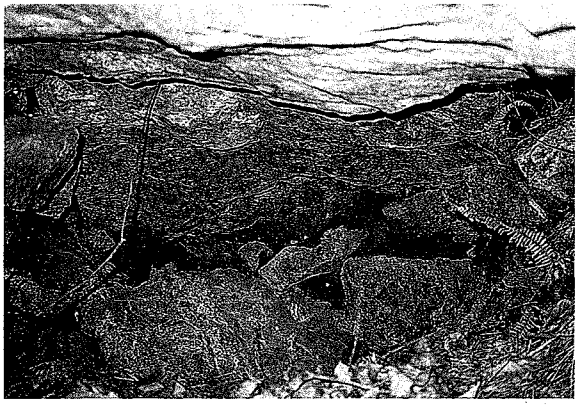

写真10　松尾山Ｐ－３号墳（石室の奥壁）

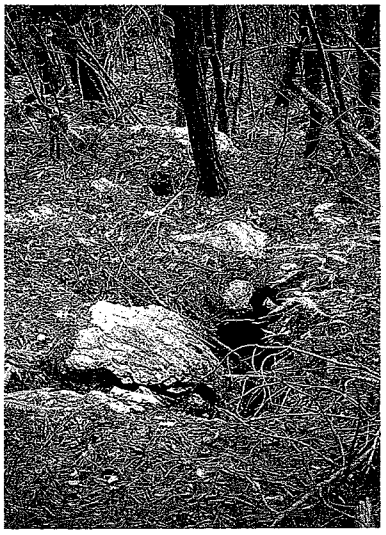

写真11　松尾山Ｂ－２号墳
（天井石が露出）

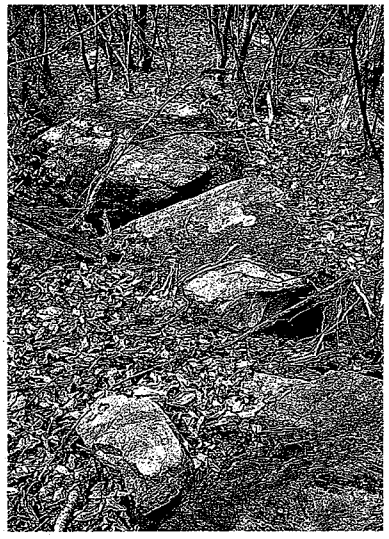

写真12　松尾山Ｄ－３号墳
（天井石が露出）

写真13　松尾山Ｋ号墳
（天井石が露出）

較的緩やかな上方に墓域を設けざるを得なかったためと考えられる。

４．西芳寺川古墳群

①古墳群の構成　従来から、北松尾古墳群、ボウジョウ古墳群、上園尾古墳群としてまとめられてきたが、ここでも新たに古墳が確認されたことで、『市地図96』では「西芳寺川古墳群」として扱われることになった。本稿では、これらをＡ（４基、北松尾古墳群）、Ｂ（５基、ボウジョウ古墳群）、Ｃ（『市地図96』より登録）、Ｄ（『市地図96』より登録）、Ｅ（４基、『市地図96』より登録）、Ｆ（２基、上園尾古墳群）の６支群に分割して考える。古墳総数は17基である。なお、本古墳群には神ヶ谷古墳が含まれるが、この古墳は通常の群集墳でないため、ここでは扱わない[23]。

②遺跡地図での変遷　『嵯峨野71』では、北松尾群集墳、ボウジョウ群集墳、上園尾群集墳にまとめられている。この状態は『市地図96』の直前まで変化なくきた。ただし細部に関していうと、『府地図72』では、62ボウジョウ古墳群が上園尾古墳群を包括した事もある。

③古墳群の特徴　Ａ　立地　古墳はすべて西芳寺川と呼ばれる狭い谷川の斜面に築造されてい

る。いずれも見通しがまったくきかない。この点が古墳群の最大の特色である。

古墳の立地条件を詳しくみると、谷川近くの斜面に築かれるもの（A、F）と、それよりやや上方の斜面に築かれたもの（B、C、D、E）の二者がある。このうち、Aの立地する斜面は比較的緩やかであるが、Fの場合はかなりの急斜面に古墳を造っている。BとEはやや上方の斜面にあり、等高線に沿って古墳が並ぶ。この状態は松尾山古墳群のB、D、Pと同じである。Eの立地する丘陵斜面は、裾部が急傾斜であることから上方に古墳が築造されたと思われる。Eは谷

表２　西芳寺川古墳群一覧表

	古　墳　名	立地・配置	墳形 規模（m）	主体部 規模（m）	備　　考
1	西芳寺川A-1号墳 （北松尾１）	谷間斜面、裾部	円墳 径10、高2.5	横穴式石室　無袖　長(3.9)、幅1.4、高(2.0)	２号墳に近接、２号墳よりやや大
2	西芳寺川A-2号墳 （北松尾２）	谷間斜面、裾部	円墳 径10、高2	横穴式石室　無袖　長(2.35)、幅1.25、高(1.5)	
3	西芳寺川A-3号墳 （北松尾３）	谷間斜面、裾部	円墳 径10、高3.2	横穴式石室　無袖　長(4.3)、幅1.1、高(1.6)	
4	西芳寺川A-4号墳 （北松尾４）	谷間斜面、裾部	円墳 径10、高3.2	横穴式石室　無袖　長(4.6)、幅1.35、高1.85	３号墳に近接、３号墳よりやや大
5	西芳寺川B-1号墳 （ボウジョウ１）	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径17、高3.8	横穴式石室　両袖　全長10.8　玄長3.6、玄幅2.3、玄高3.7、羨幅1.15、羨高2.3	最大規模
6	西芳寺川B-2号墳 （ボウジョウ２）	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径14、高2.1	横穴式石室　両袖　全長(5.7)、玄長2.6、玄幅1.5、玄高(2.2)、羨幅0.9、羨高(1.5)	最も小型
7	西芳寺川B-3号墳 （ボウジョウ３）	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径15、高4	横穴式石室　両袖　全長6.25、玄長3.15、玄幅1.9、玄高(2.6)、羨幅(1.1)、羨高(1.5)	１号墳につぐ規模
8	西芳寺川B-4号墳 （ボウジョウ４）	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径15、高3.5	横穴式石室	主体部は埋没
9	西芳寺川B-5号墳 （ボウジョウ５）	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径７、高0.5	横穴式石室	道路下にあり、目立たない。主体部は埋没
10	西芳寺川Ｃ号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、石材露出
11	西芳寺川Ｄ号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径10、高1	横穴式石室　袖不明　全長(2)、幅1.5、高(1.8)	市地図96より、石室開口
12	西芳寺川E-1号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径13、高2	横穴式石室　袖不明　全長(2)、幅1.45、高(1.6)	市地図96より
13	西芳寺川E-2号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径13、高2	横穴式石室	市地図96より、天井石と側壁材露出
14	西芳寺川E-3号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径15、高2.5	横穴式石室	市地図96より、規模最大、天井石の一部露出
15	西芳寺川E-4号墳	谷間斜面、裾やや上部	円墳 径10、高1	横穴式石室	市地図96より、規模最小、石材露出
16	西芳寺川F-1号墳 （上園尾１）	谷間の急傾斜な斜面裾部	円墳 径10、高1	不明	墳丘は低平で主体部は不明
17	西芳寺川F-2号墳 （上園尾２）	谷間の急傾斜な斜面裾部	円墳 径10、高1	横穴式石室	横穴式石室の天井石と側壁石材が露出

数値は推定を含む　　（　）は現状値

写真14　西芳寺川Ｄ号墳（開口した状態）

写真15　西芳寺川Ｄ号墳（石室の内部）

写真16　西芳寺川Ｅ－２号墳（天井石が露出）

写真17　西芳寺川Ｅ－３号墳（天井石が露出）

写真18　西芳寺川Ｆ－2号墳（開口した状態）

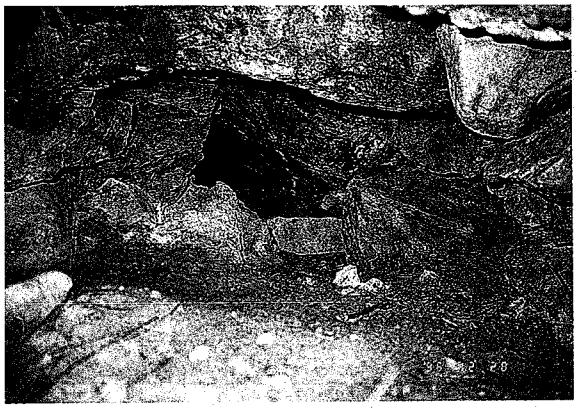

写真19　西芳寺川Ｆ－2号墳（石室の内部）

写真20　西芳寺川Ｅ－１号墳（石室の奥壁）

川沿いの小道からは決して発見できない支群である。

なお、Ｂは従来から５基とされてきたが、実際には４基が等高線に沿って並び、５号墳は道路下にあって見落とす可能性が高い。遺跡地図の配列は正しいものではない。この配列は『嵯峨野71』にまで遡るため、転記が繰り返され現在に至ったことは明白であり、現地確認の必要性を示して余りある。

Ｂ　墳丘　すべて円墳と判断できる。Ｂの３基は卓越した規模を有するが、それ以外は墳丘の大半が埋没しており、地上からは目立たない。本来さらに大きな円墳であったことは確実である。墳丘規模の大きいＢでは、Ｂ－１が最大で直径17m、高3.8m、次いでＢ－３、Ｂ－４が直径15m程度、小さめのＢ－２においても直径14mある。横穴式石室の規模が大きいため、それを覆う墳丘も自然と大きくなったとみてよい。すべて保存状態は良好で、丘陵側に掘り込まれた周溝も良好に残る。

Ｃ　横穴式石室　確認されるものはすべて横穴式石室である。Ａの４基とＢの３基は早くから開口状態で[24]、『嵯峨野71』にも石室の写真や実測図が掲載されている。新たに確認された古墳では、天井石が露出するものとしてＣ、Ｅ－２、Ｅ－３、Ｅ－４がある、またＤ、Ｅ－１は内部が観察できる。Ｆ－１は新発見ではないが、石室の一部が観察できるため、今回写真を掲載した。

石室の規模について述べると、Ａの４基はともに全長４ｍ前後、幅1.1～1.4mの無袖石室である。新たに確認されたＤとＥ－１は、奥壁付近の幅が1.5m程度ある。この数値だと無袖の可能性が高いが、前述した松尾山古墳群のＢ－２、Ｂ－５、Ｂ－７、Ｄ－２、Ｌ－１、Ｐ－３に比べて大きい点が注意される。Ｂの３基はすべて両袖で規模も大きい。横穴式石室の規模・形態において差が大きいのは、築造された期間が長かったことを示すと考えられる。

④小結　見通しのきかない谷間の急斜面に築かれるという特異な立地条件をもつ古墳群である。主体部の横穴式石室は無袖石室（Ａの４基）がある反面、規模の大きな両袖石室をもつＢ（３基以上）のような支群も形成された。Ｂでは、Ｂ－１が大枝山古墳群の中で最大のＡ型式に、Ｂ－３が次の規模をもつＢ型式に属するというように、互いに共通性があることが判明しており[25]、古墳群の性格を考える際の１つの拠り所となっている。

古墳群の築造時期であるが、石室の形態からみると、最初に規模の大きなＢ支群が形成され、次いでＤ、Ｅ、最後に無袖石室をもつＡの支群が形成されたと理解できる。このように整理すると、築造順序はきわめて連続的となる。新発見の古墳は、従来知られていたＡ・Ｂの築造時期差を埋める資料として、重要な意味をもつ。

５．西芳寺古墳群

①古墳群の特徴　**Ａ　立地**　松尾山の南斜面、東西200mの範囲に43基が集中して築かれた古墳群である。一部は西芳寺庭園に組み込まれており、保存状態は良好であるが、寺院への拝観に制限があるため古墳群の認識は『嵯峨野71』以降著しい進展はない。筆者も実見していないため、ここでは『嵯峨野71』に示された内容から類推して述べる。

B　墳丘　『嵯峨野71』では「苔寺群集墳」として個々の古墳のデータが掲載されている。それによると、古墳の規模は直径10ｍ程度が中心であるが、それ以上のものも多数ある。一覧表からそれらを選び出すと、苔寺８号墳は直径20mで高さ６ｍ、次いで19号墳が直径17mで高さ５ｍ、34号墳・40号墳が直径16mで高さ５～６ｍとなる。以下、直径15m級が10号墳、12号墳、17号墳、20号墳と続く。墳丘高は計測の仕方によって異なるとしても、直径20mの規模は群集墳としては大型である。規模の大きな円墳で構成された古墳群であることは確かであろう。

C　横穴式石室　一覧表では３基分のデータが示されている。それによると、苔寺17号墳は両袖で玄室長4.0m、幅1.8m、高さ2.5mを有する。また23号墳と26号墳は無袖で、それぞれ全長5.5mで幅1.6mと、全長6.5mで幅1.25mあるという。17号墳は玄室長４ｍとあるが、この規模の石室は近傍には知られていない[26]。また無袖とされる23号墳・26号墳も石室幅が広い点は注意される。

②小結　斜面の狭い範囲に43基の古墳が密集して築かれた点に最大の特色がある。庭園に組み込まれた関係で古墳に関する資料は乏しいが[27]、公表された数値によると墳丘・石室の規模は概して大型である。古墳の規模が大きいことから、築造時期も比較的早かった可能性がある。

本古墳群は西芳寺川の谷口にあたる丘陵斜面に築造されている。このことは先述した西芳寺川古墳群の出口を押える関係にあり、こちらの古墳群が優位な立場にあったことが想定される。墳丘・石室の規模が大きいことも、それと関係するものであろう。この他、43基という古墳数は松尾山古墳群に近似する。この古墳群は実態があまり知られていないものの、洛西の群集墳を理解する上で重要な位置を占めるため、踏査を果たした上で改めて評価を下したい。

６．嵯峨野の古墳群について

①左岸嵯峨野の群集墳とグルーピングの再検討

松尾地域と同様、左岸嵯峨野の古墳群についても、『嵯峨野71』並びに『府地図72』の段階で基本的な枠組みが決められている。しかし、ここで示されたまとまりは、群集墳の構成を正しく反映したものではないと筆者は考えている。なぜなら、第１に谷間に密集するものと山頂に立地するものをひとまとめとしていること、第２に谷間に築かれた古墳においては別の谷間のものも含めていることである（例：長刀坂古墳群）。群集墳のまとまりを復原するにあたっては、まず山頂と斜面・谷間のものを分け、ついで谷間では向かい合うもの同士でまとめる必要がある。こうして再構成したものが図７である。西側からＡ（朝原山西谷間）、Ｂ（朝原山山上）、Ｃ（朝原山－長刀坂谷間）、Ｄ（長刀坂山上）、Ｅ（長刀坂谷間）、Ｆ（遍照寺山山上）、Ｇ（山越谷間）、Ｈ（山越山上）、Ｉ（御堂ケ池谷間）、Ｊ（御堂ケ池山上）、Ｋ（音戸山西谷間）、Ｌ（音戸山山上）、Ｍ（音戸山南斜面）にまとめることができる。

また、このように整理すると、山上に築かれた古墳と谷間に密集する古墳は互いに近接して営まれていることも明白となる。具体的に示せば、Ｂ－Ｃ、Ｄ－Ｅ、Ｆ－Ｇ、Ｉ－Ｊ、Ｌ－Ｍの関係が指摘でき、第３章で扱った松尾山古墳群での、山頂に築かれた古墳と山腹や谷間に築かれた古墳の関係に類似することがわかる。このように、桂川を挟む両岸の群集墳は、２基ないし３基

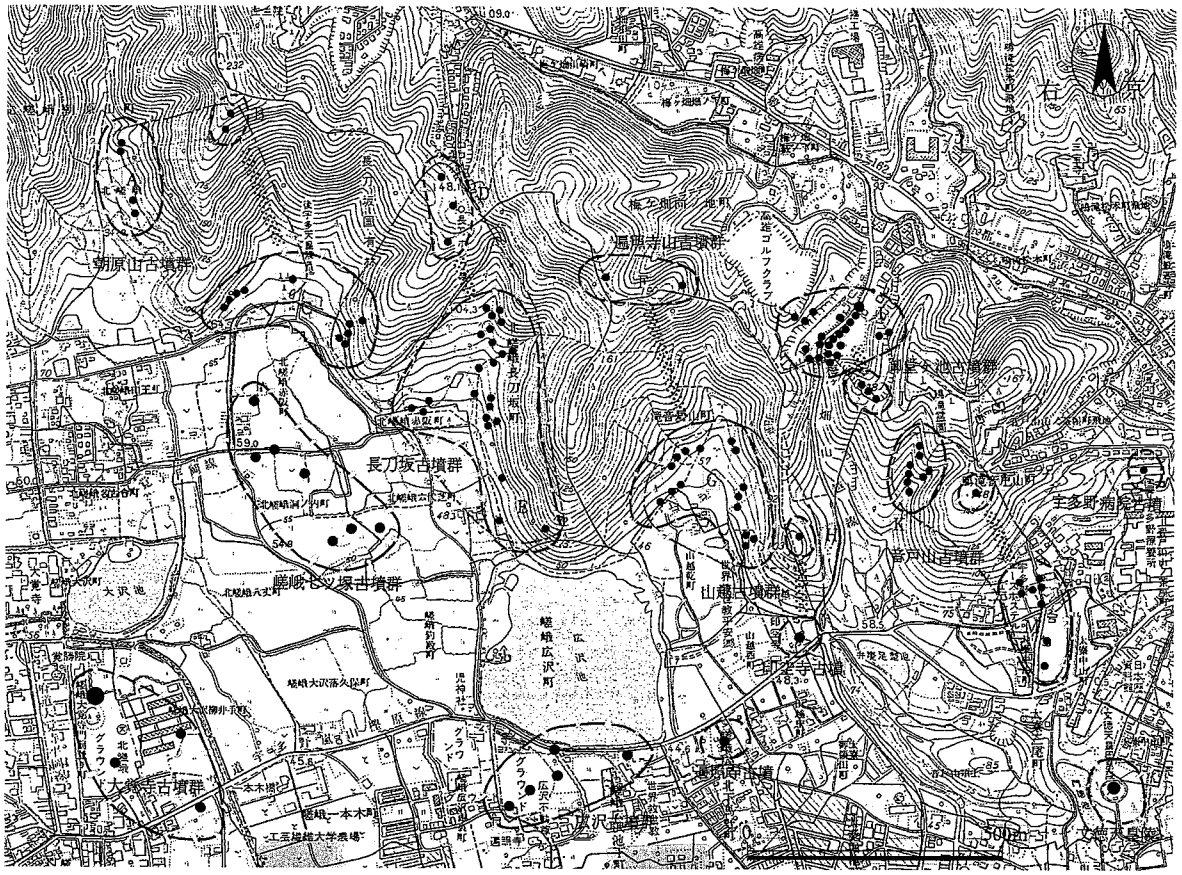

図７　左岸嵯峨野の群集墳のグルーピング（細線は『市地図96』）

からなる山頂の古墳と、谷間に密集して築かれた古墳多数が近接して営まれるという点で共通した構成がみられるのである。

ここで問題となるのが、山上に築かれた古墳と谷間の古墳とではどのような差があるのかという点である。松尾山古墳群の場合でいえば、山頂に築かれたＥ・Ｇの古墳は横穴式石室の規模が大きいものの、山腹・斜面に築かれた古墳と基本的には同じ内容をもつ古墳であることが判明している。左岸嵯峨野の場合、山頂に立地する古墳の調査例が少ない点で確かなことはいえないが、調査例の１つである御堂ケ池26号墳の場合は、墳丘・石室の規模は大きいとはいえず、むしろ無袖の横穴式石室をもつ点で谷間に築かれた古墳と同じ内容をもっている。この他、遍照寺山古墳群の１基も石室が露出しており（写真21）、それを見る限り規模や内容に格別の差があったとはいいがたい。以上から、両岸地域の群集墳では立地の差異によって古墳の規模や内容にさほど差がなかったといえそうである。

写真21　遍照寺山１号墳の石室（1983年２月撮影）

ところで、左岸嵯峨野では谷間に築かれた古墳が圧倒的に多く、逆に松尾山では山腹を上った斜面に古墳が多いが、これは単に地形的な要因で説明できるのであろうか。確かに、左岸嵯峨野の丘陵部は古墳立地に適した南向きの緩斜面が広がっている。しかし松尾山の

場合は、平野部に対する面が急峻な断層崖であるため群集墳の立地には適さない。このことは、古墳を築く際に大きな障害となったと考えてよい。標高の高い山腹に古墳の大半が築かれた松尾山古墳群の場合は、やはり地形的な要因が第一にあったと考えておきたい。

②古墳立地の共通性

前項では左岸嵯峨野と松尾に築かれた群集墳について、その構成内容を検討したが、ここでは両岸での古墳分布の傾向を改めて検討しておこう。

まず立地条件をもとに両岸の古墳を整理したのが表３である。この表から、両岸での古墳立地は首長墓系譜に連なる古墳においても共通性がみられることがわかる。すでに指摘されているように、左岸嵯峨野では低地に大型の前方後円墳、台地上に前方後円墳と大型円墳が築かれ、丘陵部には前述した群集墳が築かれている。つまり地形の低い所に規模の大きな古墳が築かれ、高い所には規模が小さな古墳が築かれるのである[28]。表３は、こうした関係が右岸地域においても同様であったことを示している。

そこで注目したいのが松尾十三塚古墳群の位置づけである。この古墳群の実態については、第２章で述べたように不明な点も多いが、墳丘・石室の断片的な状況は類推できた。これを左岸嵯峨野に築かれた嵯峨七ッ塚古墳群や大覚寺古墳群などとの関連で比較すると、比較的大型の円墳で構成された古墳群として類似性が指摘できる。２つの古墳群は群集墳に先行して築かれたと考えられるため、まず大型円墳数基からなる古墳群が築かれ、ついで丘陵部に群集墳が築造された経過があったことになる。松尾十三塚古墳群は、立地からみてその可能性をもつ古墳群であることを指摘しておきたい。

次に、低地に築かれた前方後円墳を検討する意味で、右岸山田に築かれた清水山古墳と天鼓ノ森古墳についてみておく。２つの前方後円墳は、右岸地域に展開した首長墓系譜「山田グループ」の最後に位置づけられてきた古墳で[29]、年代的には６世紀初めから前半頃と推定されてきた。それは、丘陵から台地、そして低地へという古墳の立地条件から位置づけられたのであったが、実態は不明で問題を残してきた。再度、立地条件をもとに古墳を位置づけると、左岸嵯峨野に築かれ

表３　桂川右岸・左岸での古墳立地

立　地	右　岸（松尾）	左　岸（嵯峨野）	種　類
山頂	松尾山A. B-1. F. H	D長刀坂山上、F遍照寺山山上	群集墳
尾根筋	松尾山C. J. L. N.R （山田桜谷1.2）	B朝原山山上、H山越山上、J御堂ケ池山上、L音戸山山上	群集墳
山腹斜面	松尾山B. D. I. M. P	M音戸山南斜面	群集墳
谷間斜面	松尾山K. Q、西芳寺川A. B. C. D. E. F	A朝原山西谷間、C朝原山－長刀坂谷間、E長刀坂谷間、G山越谷間、I御堂ケ池谷間、K音戸山西谷間	群集墳
台地	（穀塚）	（仲野親王墓、大覚寺、嵯峨七ッ塚）	前方後円墳　大型円墳
低地	松尾十三塚 （清水塚、天鼓ノ森）	（蛇塚、天塚、清水山）	前方後円墳　大型円墳

（　）は首長墓系譜の古墳

た蛇塚古墳や天塚古墳に対応することになり、６世紀中ごろから後半にかけて築かれた可能性も考えられる。清水山古墳と天鼓ノ森古墳はともに壊滅状態にあり、確かなことはわからないが、１つの問題提起として記しておく。

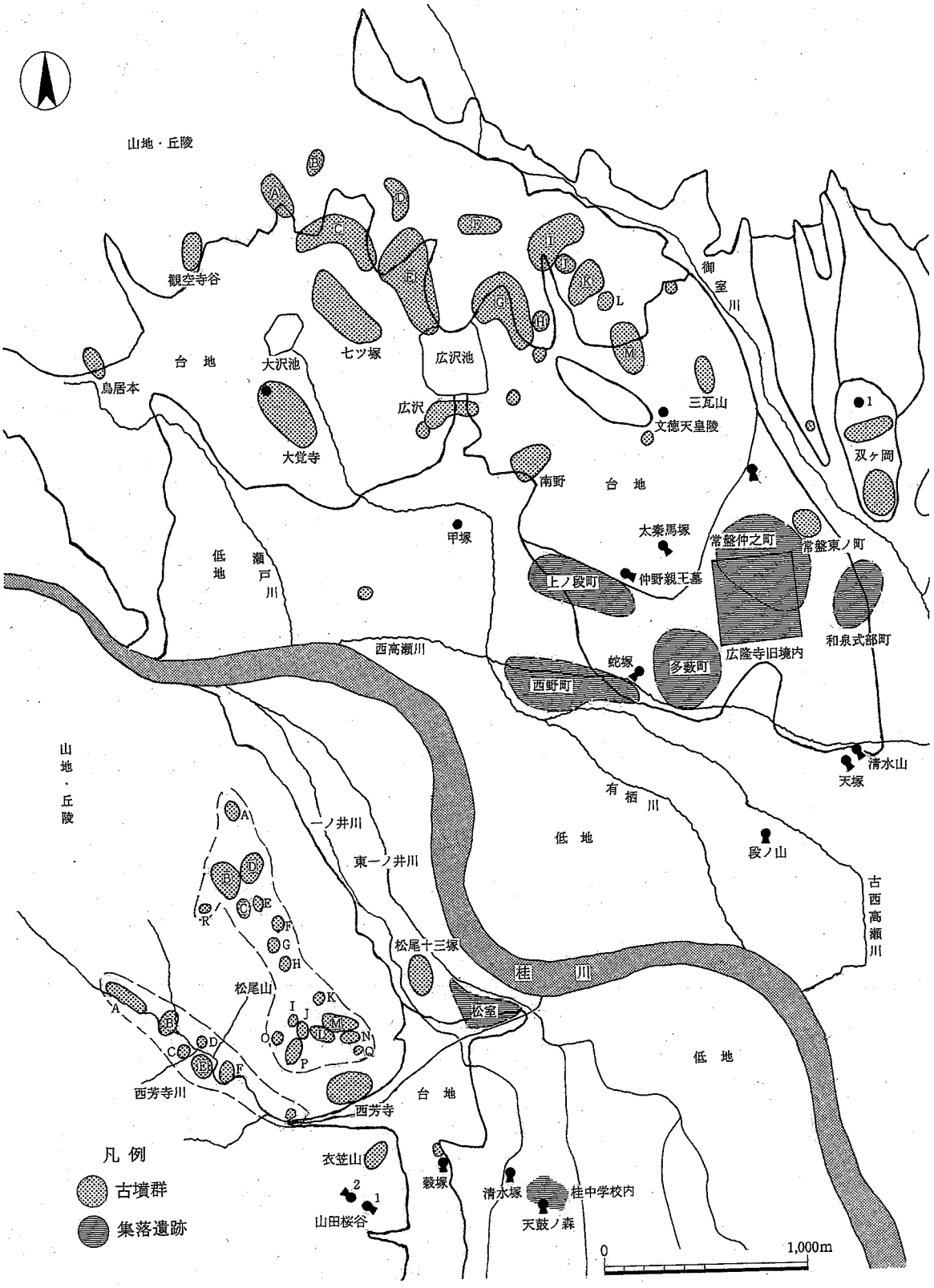

図８　嵯峨野の地形と古墳・集落遺跡の分布

7．洛西の開発と葛野秦氏

①『日本書紀』にみる葛野秦氏

『日本書紀』には山背の秦氏に関連した記事が散見できる。それを整理すると以下となる。[30]

1　応神14年条　「弓月君が百済より来朝する。」

2　雄略12年10月条　「秦酒公が天皇に侍り、琴で天皇を悟す。」

3　雄略15年条　「秦の民を聚め秦酒公に賜う。公は庸調を奉納し、禹豆麻佐の姓を賜う。」

4　欽明即位前紀　「欽明天皇が秦大津父を山背国紀郡深草里より探し出して得る。」

5　推古11年11月条　「秦造河勝が皇太子（聖徳）から仏像を受け、蜂岡寺を造る。」

6　推古18年10月９日条　「秦造河勝を新羅の使者の導者とす。」

7　推古31年７月条　「葛野の秦寺に新羅の仏像を入れる。」

8　皇極３年７月条　「葛野の秦造河勝が民を惑わす大生部多を打つ。」

１は百済からの渡来伝承記事で、伝承を古くするため応神朝に挿入したものとされる。２・３は秦酒公が雄略天皇に近侍し、禹豆麻佐（太秦）の称号を賜わったという記事。４は秦大津父という人物が山背国紀伊郡深草里（国郡里の地名表記は後世の作為）に居り、欽明朝に出仕し大蔵を管理したという記事である。この紀伊郡深草里は同じ『日本書紀』皇極２年11月条にも「深草屯倉」として登場するため、ここに皇室関係の領地があり、秦氏はそれを管理する立場にあったことを示すものであろう。

本稿との関連で重要なのは、秦造河勝について記した推古・皇極朝の史料５～８である。これらは７世紀初頭から前葉にわたる時期に該当しており、河勝が山背の葛野地方を拠点に飛鳥朝廷においては聖徳太子の側近として活動していたことを記している。特に仏教への信心が篤かった太子のそばに近侍した関係で、河勝自身も葛野において仏像を拝受し寺院を建立したことがみえるが（史料５・７）、これは河勝自身が積極的に仏教文化を山背に導入しようと計ったとみるより、太子つまりは朝廷の影響力を背景に仏教文化を手段として山背での勢力拡大に努めた結果とも受け取れる。

以上の史料５～８と、本稿で検討してきた古墳群との関係であるが、ここで取り上げた古墳群の多くは６世紀から７世紀中葉に属するため、史料５～８はその終わり部分に該当することがわかる。したがって、左岸嵯峨野に巨大な前方後円墳や大型の円墳群が築かれ、それに遅れて丘陵部に夥しい数の群集墳が形成された頃、つまり洛西が「群集墳の時代」（６世紀末葉から前葉）を迎えていた頃に、秦造河勝に関する最初の史料５が登場するのである。このことは、河勝が飛鳥朝廷で重きをなした時期と洛西での群集墳形成がうまく重なることを意味する。

嵯峨野に築かれた群集墳の特徴としては、第１に古墳群の数が多いこと、第２に古墳群を構成する古墳の数が多いこと、そして第３には古墳そのものの規模が大きいことなどが指摘できる。このため、山背地方の中では際立つ存在となっているが、こうした特徴が飛鳥朝廷で太子に近侍した河勝の存在と無関係に生じたとは考えられない。嵯峨野において群集墳が盛行する背景には、

やはり秦造河勝に代表される秦氏一族の影響が色濃く反映されているとみるべきであろう。

②松尾神社と月読神社

松尾山古墳群の築かれた丘陵の裾には松尾神社（大社）と月読神社が置かれている。2つの神社は秦氏との関わりが深いだけに、ここで少し触れておきたい[31]。

松尾神社は山背でも最古の神社の一つである。祭神は二座ある。一座は大山咋神で、こちらは在地神とされるものである。賀茂社の父神にあたる。別の一座は市杵島姫命で、こちらは宗像三神の一である。海上航海の守護神であり、九州よりここに移されたものである。

松尾山の旧鎮座地は背後の松尾分土山の大杉谷（日崎の峰）に磐境、磐座の巨岩があり、当初はこれを祭祀していたという[32]。それを大宝元年（701）に秦忌寸都理が麓に社殿を造営し、その女知満留女に奉仕させた。これより代々秦氏が祭祀をつかさどったという。いずれにせよ、飛鳥・奈良時代には在地神を祭祀する一方で九州の祭神が持ち込まれ、秦氏によってここで祭祀されていたことは確かであろう。

一方の月読神社は、延喜式の葛野坐月読神社で、現在は松尾神社の境外摂社となっているが、こちらの創建はさらに古く、『日本書紀』には顕宗天皇3年2月1日条にみられる。それによると阿閉臣事代が任那から帰国する際に月の神が我を祭れと託宣したので朝廷では葛野郡の歌荒樔田の地を与え、壱岐県主の押見宿禰が奉仕して、壱岐から天月神命を移したという。天月神命は、饒速日命降臨に従った三十二神の一つで、壱岐県主の祖神でもある。その後、平安時代の仁寿3年（853）、畿内で疱瘡が流行したが、この時も月神が現われ「松尾の南の山に移せ」と託宣があった。よって斉衡3年（856）3月に移築したのが現地である。押見宿禰の子孫が神職をついだが、中世以降は松尾神社に包括された。なお、葛野郡の歌荒樔田の歌は「宇多」であり、荒樔田が「嵐山」の語源となったという。

両神社に共通するのは、海上航海に由来する九州の神が祭神におかれるという点である。こうした祭神が山背地方に持ち込まれ祭られた背景としては、この地域を開発した氏族が渡来系氏族であったため、航海の安全を祈願するための祭神が持ち込まれ、在地神とともに祭祀の対象となったと理解される。渡来系氏族としての秦氏の一側面を示すものであろう。それに関連して、松尾神社の御輿渡御祭（松尾祭）では、舟渡御が行なわれる。これは4月下卯日の出御祭において松尾七社の御輿が対岸に渡御するものである。単に御輿が桂川を渡御するだけのものであるが、過去の渡来伝承を想起させる点で興味深い祭事である。

③松室遺跡の調査成果から

松尾山とその周辺に築かれた古墳群との関係で注目される遺跡に松室遺跡[33]がある。この遺跡は1983・84年度に実施された市立松室中学校建設に伴う発掘調査によって発見された遺跡である。遺跡の立地する箇所が桂川の蛇行による攻撃面に当るため、当初遺跡は存在しないと予想されたが、弥生・古墳時代の遺構・遺物が良好に検出されたことで、洛西の開発状況を知る上で興味深い遺跡となった。

古墳時代の遺構としては、前期では竪穴住居跡4棟、後期では掘立柱建物4棟、溝、ピット、

落込、それに流路がある。ここで注目するのは、ＳＤ９と呼ばれた大規模の流路遺構である。これは調査地西側において西北から南東方向に検出されたもので、幅９ｍ以上、深さ1.6mの規模をもつ。そして、溝から出土した土器によって、開削時期は古墳時代後期に遡ること、廃絶するのは鎌倉時代以降であることが判明した。

このＳＤ９が注目されるのは、開削年代の古さとともにその検出位置が松尾神社の東を流れる「東一ノ井川」の延長位置にあたることである。現在の東一ノ井川は松室遺跡の手前で東に方向を変えるが、ＳＤ９の検出位置は東一ノ井川をまっすぐ南に延長させた位置に合致する。このことは、ＳＤ９が東一ノ井川の旧流路であることを示すもので、それが中世に埋没したため東に付け替えられ、現在の東一ノ井川となったことが調査で裏付けられたのである。このことは、西側を流れる「一ノ井川」も同様の経過があったことを想定させる点で重要な事項を含んでいる。

松尾神社の東に流れる一ノ井川と東一ノ井川は、渡月橋付近に取水口を設けた潅漑用水路で、「洛西幹線水路」として現在も利用されているものである。一般には秦氏によって開かれた水路とされており[34]、室町時代の明応４年（1495）製作による「西岡用水差図案」にも「一ノ井」として描かれている（図10）。それが実際の調査によって古墳時代後期にまで遡ることが裏付けられたのであるから、その意義は大きい。「ＳＤ９は秦氏が古墳時代に現桂川の渡月橋付近に構築したとされる「葛野大堰」から分流された潅漑用水路の一本に当たると考えている[35]。」とする報告者の見解は、妥当なものといえよう。

④「葛野大堰」と洛西の開発

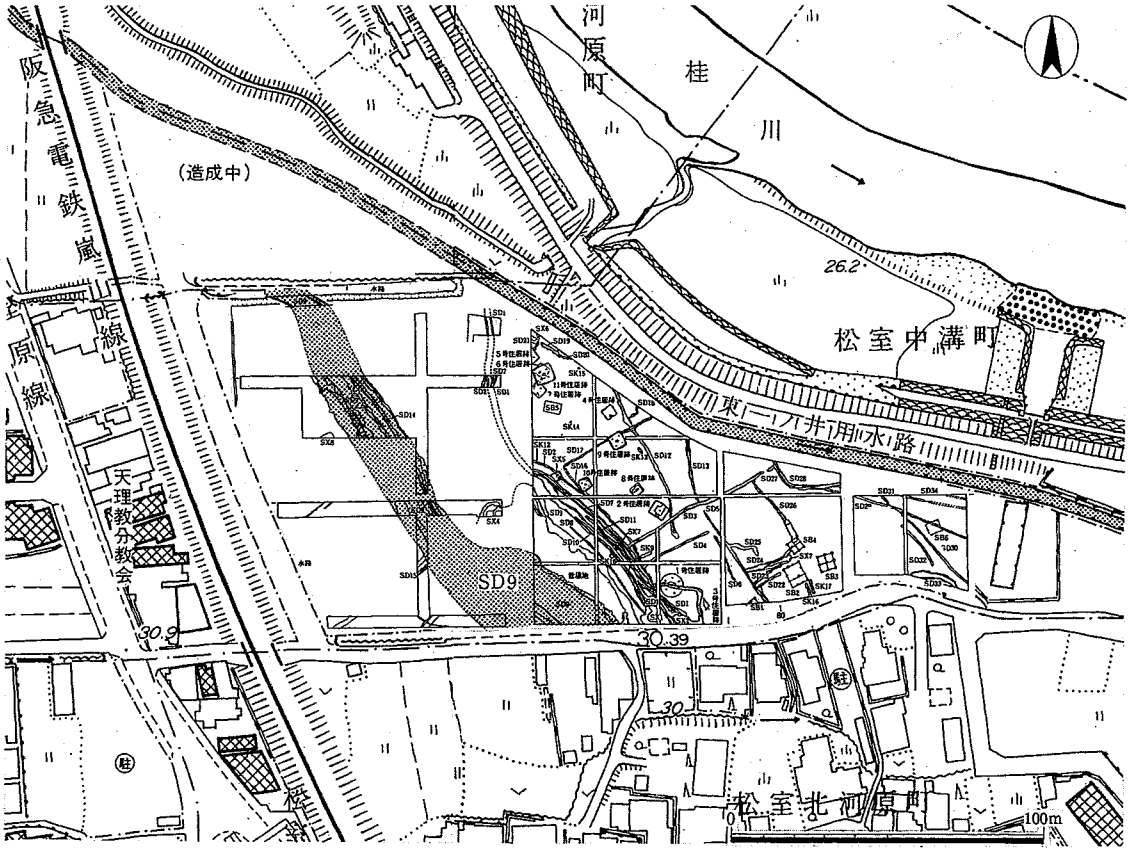

図９　松室遺跡の遺構配置図（註33の②を調整）

前項で取り上げた「西岡用水差図案」には、桂川の各所に堰が築かれ、そこから下流へ水を引くための水路が取り付く様子が細かく描かれている。水路のうち最も上流に築かれたのが前項で述べた「一井」であるが、そのすぐ下流の対岸にも「二井」と記された水路が描かれており、両者の緊密な関係が注意される。現在この場所には、「西高瀬川」と呼ばれる水路があるが、差図に描かれた二井とはどのような関係にあるのか、若干検討しておこう。

西高瀬川は江戸末期から明治初年に開削された水路で、淀川を遡って二条城に御蔵米を入れることや、保津峡を経て丹波からの資材を京都に運び入れるために掘られたものである。しかし近代になって開削されたのは市街に到達する部分であり、桂川の取水口からしばらくは古くに開かれた水路がそのまま利用されたとするのが大方の見方である[36]。この点で注目されるのが、取水口からおよそ1㎞の、嵯峨村付近から南東流し、郡村に達する流れで、註36－③ではこれを「古高瀬川」と呼んで区別している。確かに、取水地点の位置や地形の傾斜を配慮した水路方向の共通性、あるいは潅漑可能な地形面の広さなどは、右岸の水路（一ノ井川・東一ノ井川）に共通する要素が多い。右岸側には水路が開削されながら、広大な平野部を控えた左岸側に水路が開かれなかったというのはいかにも不自然であるから、やはり両岸で同時に開削されたとみるべきことを示している。

ここで水路と古墳の前後関係を少し整理しておく。1つは右岸での一ノ井川、東一ノ井川と松尾十三塚古墳群の関係である。この古墳群については、一ノ井川と東一ノ井川の間に築造されている点に着目したい。なぜなら、水路が先に開削されていた場合、水路間に墓域を設定するのは不自然と考えるからである。逆に、古墳が築かれた後に水路が掘られたことは十分ありうる。このことから、松尾十三塚古墳群が築造された後に水路が掘られたとみる。水路の開削は6世紀後半を下限にそれ以前とみられるので、6世紀中葉から後葉に松尾十三塚古墳群が造られた後、水路が掘られたと考えておくと、第6章②とも矛盾しない。

同じ方法で、西高瀬川と蛇塚古墳の関係をみておこう。蛇塚古墳はその巨大な横穴式石室の特徴から、6世紀末葉という年代が想定できるが、問題は西高瀬川が開削の当初から蛇塚古墳の前方部に接していたかという点である。まず第一に、蛇塚古墳が前方部を水路に接して築造されたとは考えられない。次に右岸の例から6世紀後半には左岸でも古高瀬川の水路が開削されていた可能性がある。すると蛇塚古墳はこれより遅れて築造されたものであるから、古墳と水路は離れて築かれていたことになる。その後、江戸末になって水

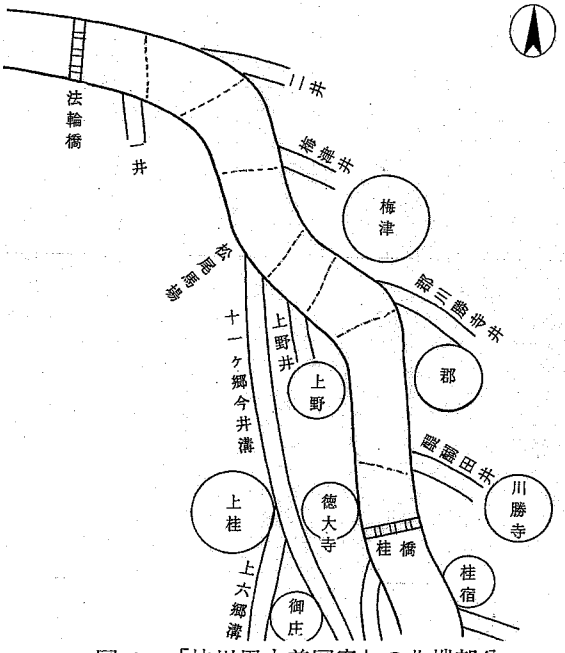

図10　「桂川用水差図案」の北端部分

路を京都の市街に引き込むための工事がなされた折り、水路の位置が上方にあがり、古墳の前方部に接するかたちとなったのであろう。

以上、古墳と水路の関係について記したが、ついでにいうと「葛野大堰」によるところの嵯峨野の開発は、あくまでも盆地の低地部、地形分類でいう「氾濫原」を対象に実施されたのであって、高燥な台地部（段丘・扇状地）は対象外であったことをつけ加えておきたい。葛野大堰による嵯峨野の開発というと、即、水かがりの悪い台地部が開発され生産性が飛躍的に向上したかのような印象を与える[37]が、台地の開発が可能となるのは溜池による潅漑技術が普及する中世以降のこととみてよい。当然、背景には人口増にともなう食糧需要の増大があったはずであるが、本稿の扱う古墳・飛鳥時代は、未だ高燥な台地を潅漑してまで食糧増産が求められる必然性も、またその技術水準もなかったであろう。そのことは実際に確認されている遺跡分布から類推できる当時の人口密度からもいえることである[38]。

このように、群集墳が築造された頃の洛西嵯峨野は、渡月橋付近に取水口をもつ水路が左岸・右岸の低地部を潅漑する情況が見て取れた。当然、古墳が築かれた松尾山上からも眼下に水路が見下ろせたはずで、古墳と水路には密接な関係があったとみて大過ない。この点で、水路の維持・管理に就いた有力者が古墳に埋葬されたと考えるのが自然であろう。本稿のはじめでは、洛西嵯峨野の地域的特性が水利による強固な結び付きを前提にしていると述べたが、その要因が潅漑用水路の維持・管理と下流域に対する水利権の確保であったことを、ここで改めて強調しておきたい。洛西嵯峨野の位置は、山背西南部の水利権を掌握する上できわめて重要な位置を占めていたのであり、であるから水路を見下ろす位置に古墳を築くことで、その権威を視覚的に示したのである。

「秦氏本系帳」には「塞_堰洪河_通_溝澮_。開レ田萬頃。秦富数倍。・・今大井堰様。則習レ彼所レ造。」として葛野大堰の構築の様子が記されるが、この箇所は洛西嵯峨野での開発の成功を謳ったものとみてよいのではないか。

8．おわりに

『市地図96』で再登録を果たした松尾十三塚古墳群の内容紹介から始めて、周辺に分布する松尾山古墳群・西芳寺川古墳群・西芳寺古墳群の現状を紹介した。次いで左岸嵯峨野の群集墳のグルーピングを再検討し、山上と谷間の群集墳がセット関係にあること、また桂川を挟む両岸での古墳立地の共通性を述べた。さらに嵯峨野の開発主体として著名な葛野秦氏については、松室遺跡で検出した水路が葛野大堰から分岐した用水路の一つであり、左岸側では西高瀬川がその可能性のあることを記し、洛西嵯峨野の開発を古墳との係りで若干論じた。前半の部分は具体的な資料の紹介を中心としたが、第６・第７章では嵯峨野の遺跡と葛野秦氏の関係についての筆者の私見を披瀝した。筆者が強調したかったのは、桂川で分断して考えがちな古墳群への認識を改め、両岸で連動しながら展開したとみることであったが、状況証拠が不十分なまま論を進めた感じは否めない。

筆者は松尾山周辺の古墳群は大半を確認していたため、『市地図96』で新たな分布が示されたことは大きな驚きであった。そこで1996年末から翌年春にかけて現地を踏査し、『市地図96』に掲載もれの古墳（たとえばCの２基）も確認できた。この古墳群は、組織的な分布調査が進めば、現在に倍する古墳が確認されるであろうし、墳丘測量や石室実測が行なわれれば、群集墳研究に貴重な資料を提供することになろう。本稿は、さらに分布調査を進めた上で成すべきであったが、現状での周知を最優先に考えたため、資料紹介を中心に構成した。また、本稿の概要は1997年５月17日の「古墳時代研究会」で発表したもののうち、群集墳の展開部分のみを再構成したものである。発表当日には貴重な意見をいただいた。また古墳発見に努めてこられた屋木英雄氏からは直接御教示をいただき、さらに当研究所職員各位からも援助を得た。特に本文中の写真１～20は、筆者がコンパクトカメラで撮影したカラーネガフィルムを宮原健吾がモノクロ写真に処理されたものである。以上を記して感謝の意を表す次第である。

註・参考文献

（１）松尾に築かれた古墳は大半が古墳時代後期の「群集墳」であるため、本稿で単に「古墳群」とした場合も群集墳と同義語であることを最初に断わりおく。

（２）①田辺昭三・上村和直・丸川義広「古墳群の性格」『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第８冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年

②丸川義広「福西古墳群と大枝山古墳群　－京都市の西郊に営まれた二つの群集墳について－」『長岡京古文化論叢』中山修一先生喜寿記念事業会　1992年

③丸川義広「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』第51号　京都考古刊行会　1989年

（３）『京都府遺跡地図』第４分冊　京都府教育委員会　1972年

（４）『史料京都の歴史』２　考古　平凡社　1983年

（５）『京都市遺跡地図』　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1980年

（６）『京都市遺跡地図』　京都市文化観光局　1986年

（７）『京都府遺跡地図』第４分冊〔第２版〕　京都府教育委員会　1989年

（８）『京都市遺跡地図』　京都市文化市民局　1996年

（９）梅原末治「山城の古墳墓」『人類学雑誌』第29巻　第12号　1914年

（10）梅原末治「十三塚」『郷土研究』第２巻　第５号　東京郷土研究社　1914年

（11）浅井暦造『松尾乃郷』　松尾尋常高等小学校　1938年　P30

（12）「泓塚」『山州名跡志』巻之九　新修京都叢書　第15巻　臨川書店　1969年　P301

（13）「桜塚　泓塚」『山城名跡巡行志』第四　新修京都叢書　第22巻　臨川書店　1972年　P408

（14）『十三塚　－現況調査編－』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告書　第９集　神奈川大学日本常民文化研究所　1984年

（15）「昭和２年の航空写真、京の町、田畑も多く　－京都中央卸売市場、真新しい姿－」『京都新聞』1993年12月22日記事　これによると、昭和２年の京の町を空撮したキャビネ版写真84枚が京都大学理学部

地質学鉱物教室で発見された。清水大吉郎氏の調査によると、陸軍参謀本部陸地測量部が大正末から昭和初めに空中写真測量用として撮影を開始したもので、建物の年代から昭和２年の撮影と判断できるという。市内の全域がわかる最古の空中写真として貴重なものであり、当研究所ではそれを複写させていただき、資料として活用している。

(16)「十三塚」『日本史大辞典』3　平凡社　1993年　P1092

(17) 高橋　潔「中臣十三塚」『リーフレット京都』NO.29　財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　1991年　ここにあるように、中臣十三塚古墳群の由来は判然としない。竹村俊則『昭和京都名所図絵』6　洛南　駸々堂　1986年　P326では「もと付近にあった「鎌足塚」と呼ばれる古墳群の遙拝所を神社化したもの」で、古墳群は「世に十三塚と称し、鎌足の殯車の址とつたえる」とある。

(18)『大漢和辞典』巻六　大修館　1957年　「泓」は、①水が深い、②水たまり、ふちの意味があり、「コウ」と発音する。泓塚はコウヅカと呼ばれた可能性もある。

(19)『山州名跡志』巻之五　前掲（12）P140

(20)「富家殿」は平安時代中期の民部卿藤原忠文の別業をいう（『雍州府志』新修京都叢書　第10巻　1968年　P561、『山城名勝志』巻第十八　新修京都叢書　第14巻　1991年　P441）。また別に藤原忠実の別業も富家殿と呼ばれた（『国史大辞典』12　吉川弘文館　1991年　P112）。

「普化」は普化宗を意味し、禅宗の一派で中国唐代の普化和尚を開祖とする。「普化ノ墓」は黄檗の門前にある虚無僧の祖、普化良庵という者の墳墓であるとする（『山州名跡志』巻之十五　前掲（12）P69、『拾遺都名所図会』巻四　新修京都叢書　第７巻　1967年　P522）。

(21)『嵯峨野の古墳時代』　京都大学考古学研究会　1971年

(22) 京都市埋蔵文化財調査センターの長谷川行孝氏より教示いただいた。

(23) 神ヶ谷古墳は1953年３月 土入れ作業中に発見された古墳である。封土はほとんどなく、主体部は石棺状を呈する石室で、長さ1.0ｍ、幅0.47ｍ、高さ0.55ｍあった。被葬者の人骨が遺存しており、永久歯がはえかわろうとする年齢とされるが、性別は不明。棚橋信文『京都市立桂中学校所蔵出土品目録－主として京都市右京区松尾、川岡、大枝区域－』1969年を参照。

(24)『松尾乃郷』　前掲（11）Ｐ29に紹介がある。

ボウジョウ古墳群　「西芳寺よりずつと奥の谷川に臨み、山腹の土を削つて石組をなし土を盛上げたと思はれる。大なるものの東稍々北に小いのが二つある。その大きさは次の通りであるがこの三つは一家の人のものであらう。

	羨道の幅	同長さ	同高さ	玄室の奥行（大人腰高にて）	同間口（大人腰高にて）	同高さ
西	1.0 米	5.85米	1.65米	3.0 米	2.1 米	3.45米
中	0.9	2.75	1.55	2.6	1.2	2.1
東端	0.95	2.25	0.95	2.8	1.8	2.7

何れも河石を以て築き基底より天井の方遙に小さくし蓋石は割合小さくてすむ様にしてある。千幾百年間には強い地震もあつたらうに余り変化の認められないのは石積の良いのによるであらう。

北松尾古墳群　「尚谷川を遡ると道路の上に二つの口が並んでいるのがわかる。これは玄室と羨道と

が境は曲面ではつきりしない。そして用ひた石は古世層の粘板岩のはげたのを煉瓦積上の如うに使ひ

	道高	道幅	道長	室高	室幅	室長
西	1.15米	0.8米	2.1米	1.75米	1.1米	2.0米
東	1.15	1.2	1.5	1.85	1.3	2.95

ている。今大体を見定めて測れば、・・」

(25)『嵯峨野の古墳時代』　前掲（21）のP189に指摘がある。

(26) 丸川義広　前掲（２）－②　桂川右岸の群集墳について検討し、西芳寺川付近を境に北側と南側に区別した。その際基準としたものは横穴式石室の形態で、玄室平面形の幅広いものが北側、細長いものが南側に多いことから、形態差が地域差を反映する可能性があることを指摘した。しかし苔寺17号墳の石室が公表された数値であるなら、むしろ南側の範囲に属する特徴をもつことになる。

(27)『松尾乃郷』　前掲（11）Ｐ28「西芳寺の柑及鈎耳什堤瓶は実に見事なものであるが恐くは古墳の出土品であろう」。Ｐ29「西芳寺指東庵の西、座禅石の上に小丘をなし楞伽窟と名づけられる玄室があり、その南方に羨道が通じている。」とある。前者の出土品とは須恵器の壷と環状の把手が付いた堤瓶であり、口絵に写真が掲載されている。

(28) 和田晴吾「嵯峨野古墳群　－考古学から見た洛西－」『洛西探訪 京都文化の再発見』淡光社　1990年　P105　ここでは全体を「嵯峨野古墳群」ととらえ、①前方後円墳を中心とした太秦支群、②大型円墳からなる四つの支群、③群集する小古墳群、の順に立地条件による階層性がみられるという。「それらの大小の古墳が、その形や規模の応じて、それぞれ固有の墓域を占有し、全体としてみごとなピラミッド形の階層構造を示している。嵯峨野古墳群最大の特徴はこの点にある。」とするが、規模の大きな前方後円墳が中小古墳より低地に築かれることが、みごとな階層構造とまで評価できるか疑問である。筆者は、前方後円墳が低地に築かれたのは、桂川から見ることを意識して築かれたこと、つまり桂川の利便性が重視されていたため、古墳を河川側から見せることが優先されたと考えている。前方後円墳の主軸が河川に並行するものが多いのも、その側面を見せることで偉容を示そうとする意図があったとみてよいだろう。

(29) 田辺昭三「首長墓の成立」『京都の歴史』１　学芸書林　1970年

(30)『日本書紀』については、『日本書紀』上　日本古典文学体系　68　岩波書店　1965年による。

(31) 松尾神社と月読神社については、①竹村俊則『新選京都名所図絵』２　西北部　白川書院　1959年　P207、②　同『昭和京都名所図絵』４　洛西　駸々堂　1983年　P351、③『京都市の地名』日本歴史地名大系　第27巻　平凡社　1979年　P1108、④『京都の歴史』１　学芸書林　1970年　P416、などを参照した。

(32)『松尾大社』（松尾大社発行）Ｐ４　「磐座祭祀　もっとも、当社の大山咋神は奈良時代になって、はじめて祭られたものではなく、太古この地方一帯に住んでいた住民が、松尾山の山霊を頂上に近い大杉谷の上部の磐座に祀って、生活の守護神として尊崇していたものと思われます。（当社神職等は、昔から、この磐座をご神跡とか御鎮座場とか称して敬拝してきました。）ところが５・６世紀の頃、秦の始皇帝の子孫と称する（近頃の研究では朝鮮新羅の豪族とされている）秦氏の大集団が朝廷の招きによ

って、この地方に来住すると、その首長は松尾山の神を同族の総氏神と仰ぎつつ、新しい文化を持って開拓に従事しました。」としている。

(33) ①平安京調査会「松室遺跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1985年

②小森俊寛・原山充志　平安京調査会「松室遺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

(34) 前掲（32）のP10「一の井、二の井　楼門内を南北に貫流している川が一の井、参道第一鳥居の 前を流れている川が二の井で、いずれも上古に秦氏が創設した農業用水です。室町末期には明智光秀、江戸初期には角倉了以が改修しましたが、終戦後は国・府・関係農民の三者が20億円を投じ、19年の歳月をかけて大改修しました。その記念碑が昭和50年参道沿いの神苑に建立されたました。」とある。ここでいう「二の井」は東一ノ井川のことである。2500分の１京都市都市計画基本図には、一ノ井川（洛西右岸西幹線用水路)、東一ノ井川（洛西右岸東幹線用水路）と注記されている。

(35) 前掲（33）の②のP98。なお、葛野大堰は『政事要略』に「秦氏本系帳云。造_葛野大堰_。於_天下_誰有_比検_。是秦氏率_催種類_所レ造_構之_。昔秦昭王。塞_堰洪河_通_溝澮_。開レ田萬頃。秦富数倍。所レ謂鄭伯之沃_衣食_之源者也。今大井堰様。則習レ彼所レ造。」とある。

(36) ①井上満郎　『渡来人　－日本古代と朝鮮－』リブロポート　1987年　P236「そう考えれば、たしかに二井を利用したかと思われる西高瀬川は、嵯峨野の南辺を沿って東流しているし・・、中略・・その痕跡はもはや残っていないから、西高瀬川に利用された水路がそれであったと考えるほかない。」

②山尾幸久「洛西の変遷　－歴史学からみた洛西－」『洛西探訪 京都文化の再発見』　淡光社　1990年　P142「嵯峨樋口から取水する溝の最初は、秦氏が工事をしたのであろう。」

③足利健亮「自然と景観」『史料京都の歴史』14　右京区　1994年　P20「そう考えられるとすれば、条里遺構および蛇塚との関係からみて、西高瀬川水路の成立を、古代といわず古墳時代までも遡らせることが可能となる。とすれば、この水路を著名な秦氏本系帳にみえる大堰の造成と開拓の推進という事跡まで遡らせてとらえることも、決して乱暴とはいえないことになるであろう。」

(37) ①和田　萃「山背秦氏の一考察」『嵯峨野の古墳時代』　前掲（21）P206「肥沃な深草地方に比して、葛野の地は標高も高く水利も悪い。当然、葛野の開発は深草よりも遅れたのであり、秦氏の各集団を動員して開拓せしめたものの、水田となしうる地は少なく、畠地（陸田）が大半を占めたであろう。」

②井上満郎　前掲（36）－①　P236「ともあれ、秦氏が５世紀後半に建設した葛野大堰は、桂川流域の今まで高燥で手のつけられなかった地域を、耕作可能な農地とした。」

(38) 本稿６章②「古墳立地の共通性」を参照されたし。台地上に古墳が多数築かれたことは、ここが墓域として利用される状態であって、未だ可耕地たりえなかったことを示すものである。

図5　松尾山古墳群と周辺の古墳群（『市地図96』をもとに作成、番号は1997年10月現在）

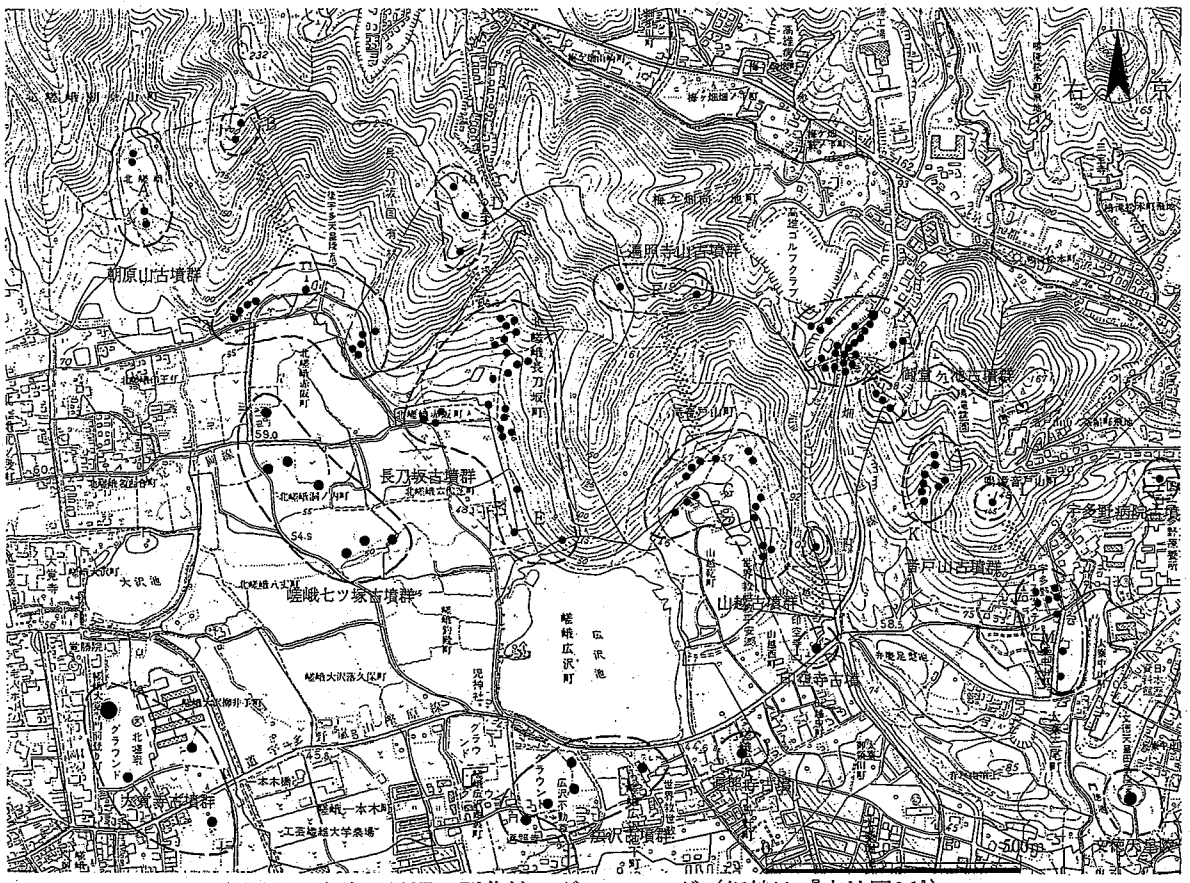

図７　左岸嵯峨野の群集墳のグルーピング（細線は『市地図96』）